

[研究論文]

作曲家としての幸田延

Nobu Koda as a Composer

平高典子

Noriko Hirataka

〈抄 録〉

幸田延（1870明治3-1946昭和21）は音楽教育家として知られているが、ウィーン留学時以来、作曲活動も鋭意行っていた。本稿では、演奏や印刷されていないと考えられるものも含め、残された作品を紹介・解説したうえで、幸田の作風や作曲活動の意義と限界について考察する。

キーワード：幸田延、日本における近代西洋音楽、作曲家

Abstract

Nobu Koda (1870–1946) is famous as a music educator, but since she studied in Vienna, she was also keenly composing music. In this paper, her remaining works including things that are considered not to be played or printed are introduced and explained, and then Koda's style and the significance and limitations of her composing activities are considered.

Keywords: Nobu Koda, Western Music in Japan, Composer

はじめに

幸田延は、黎明期の音楽取調掛で学んだのち、1889-1895年ボストン及びウィーンに留学して本格的に音楽の研さんを積んだ。留学中から作曲を始め、最後に公開演奏された記録は1931（昭和6）年である。公表された作品が少なかったことから、その活動はあまり知られていなかったが、近年2曲のヴァイオリン・ソナタ（うち1曲は日本人初の本格的な器楽曲である）が演奏されることも多くなり、作曲界のパイオニアとしての知名度が上がってきたといえよう。

先行研究としては、1993年の拙稿「幸田延の作曲作品リスト」（平高1993：30-37）がある。これ

は当時判明していた幸田の作品をリスト化したものであるが、その後の調査により追加・訂正の必要が生じたのと、これを所収する論文集が今日入手困難であるため、本稿で改めて書き直すこととした。したがってデータの部分的な部分を中心に前掲稿と重複部分は多いが、いちいち断らなかった。

萩谷由喜子の著書『幸田姉妹—洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸』には、「幸田延作品リスト」が付されており、曲の作曲年代、編成、拍子・調性・テンポ・小節数、歌詞の作者などが列挙されている（萩谷2000：282-3）。2つのヴァイオリン・ソナタについては、どちらが1897年に演奏されたのかを特定した瀧井敬子の先行研究（瀧井2004：47-78）がある。このソナタは、後述するように楽譜も出版されている。

本稿では、第1章では、幸田が和声学や対位法をどのように学んだかを紹介し、第2章では作曲（発表）年の明らかな曲を、第3章で発表年の不明な曲を紹介・解説し、最後に作曲家としての幸田の歴史的な位置について考察することとする。

第1章 和声学・対位法の学修

幸田は1882（明治15）から1885（明治18）年音楽取調掛で学び、第1回全科卒業生として卒業した。在籍中和声学を履修している。例えば音楽取調掛時代文書綴巻43『音監回議書類』上には明治17年2月の定期試験の和声学バス4声課題に対する答案が残っているが、この解答によって担当教員の奥好義（おくよしいさ1857-1933）¹⁾から、100点満点の95点を得ている。これは受験者3人中トップでの成績であった。これらの史料から、基本的な和声学の知識は在学中に得ていたと考えられる。

1889年から1年余ボストンのニュー・イングランド音楽院でヴァイオリンとピアノを学んだのち²⁾、1890年ウィーンに渡った幸田は、1891年ウィーン音楽院に入学した。専攻はヴァイオリン、副科としてピアノを学び、また和声学も履修した。

ウィーン音楽院の学籍簿によると、和声学は、1年次にグレーデナー（Grädener, Hermann 1844-1929）の副専攻対象のクラスにいた。その後の休学をはさんで、2年次にはフックス（Fuchs, Robert 1847-1927）の主専攻のクラスに所属、続く3年次では、学籍簿には記録がないが年報によると、フックスの対位法を履修した。幸田はウィーン音楽院でのすべての履修教科において一番よい「eins (1)」の成績を残しており、和声学・対位法においても例外ではなかった³⁾。

フックスは、当時すでに作曲家として高名であり、シベリウスなど後世に残る作曲家を含む多数の生徒を教えていた。その作風は優美繊細で、趣味がよく、家庭音楽向きであった。幸田はプライベートにも彼のレッスンに通ったと述べている（幸田1931：39）。後述するように、彼の添削を受けた習作も残している。幸田とフックスの作風には通底するところがあり、影響は大きかったと考えられる。

以下、実際の作品について解説する。＊は「筆者による推測ないしは仮題」を意味する。ほとんどは幸田成貴氏が所蔵する楽譜を参照した。

第2章 作曲（発表）年代が判明している作品

本章では、作曲年あるいは発表年が明らかな作品を編年的に紹介・解説する。

2-1 ＊ピアノ伴奏付きヴァイオリン・ソナタ（1895年作曲、1897年発表）

【解説】

ペン書（一部鉛筆書）の自筆譜⁴⁾が残るがタイトルも署名もない。楽器指定なしのソロ・パートと

ピアノ・パートからなる。

構成は次のとおりである。

第1楽章：変ホ長調、4/4、速度表示なし

第2楽章：ト長調、2/4、「Adagio」

第3楽章「Finale」（再現部5小節まで、以降散逸）：変ホ長調、6/8、「Allegro (Rondo)」、ピアノ・パートに未完部分あり

この曲については拙稿「幸田延のウィーン留学」で詳しく論じたので、ここではその要約を記す。

第2楽章の終わりに「Wien, 95」とあって、ウィーン時代の1895年に作曲の師ローベルト・フックスの元で書いた習作であることがわかる。帰国後まもない1897（明治30）年の「学友会演奏会」で「バイオリン及びピアノ（合奏） 賛助員 幸田幸子、同 鈴木フク子、名誉員 幸田延子 演奏／ソナタ 幸田延子 作曲」（東京芸術大学百年史編集委員会編1990：47）という記事があり、これは記録で確認できる日本人が作曲した本格的器楽曲演奏の第1号であるが、幸田は同年の談話で「せんだつて学友会に出しましたソナタ……あれは稽古中に、あつちで作つたもの」（青柳1897：27）と述べているので、このとき演奏されたのがこの習作で、3楽章が未完であるため、演奏者2人が、完成していた楽章を1つずつ演奏し、幸田がピアノで伴奏したと考えられる⁵⁾。

第1楽章はEs-Durのソナタ形式である。のびのびとさわやかな第1主題と、ピアノでまず提示される柔らかな第2主題を持つ。短い展開部で主にト調に転調して展開したあと、再現部ではEs-Durに戻って、第1主題の音型で盛り上がって終わる。

第2楽章はG-Dur、Adagioで優雅なTrio形式の楽章である。

第3楽章はまたEs-Durで軽やかなAllegroのRondoになっている。

この曲は第3楽章に未完成部分があり、後半は散逸しているため、今日では補筆のうえ演奏される。後述のもう1つの1楽章形式のヴァイオリン・ソナタ（作曲・発表年不明、発表されなかった可能性もある）と併せて、後逸部分や未完成部分に池辺晋一郎の補筆を得て、出版されている（幸田2006）。

延の留学当時盛んに作曲されたLaienhausmusik（アマチュア家庭音楽）的な魅力がある。もちろん転調の処理など作曲技法上未熟な点の多い、単調な曲であることは事実で、はるかに時代遅れのスタイルであるが、音楽取調掛設置後わずか15年ほどの段階のレベルとしてみれば、相当な域に達しているといえよう。

2-2 ＊〈今は学校後（あと）に見て〉無伴奏単声用唱歌（1901年出版）

【解説】

東京音楽学校編纂《中学唱歌》（明治34年）に最終曲として収録されている。遠藤宏は幸田の作としている。同年5月19日の「中学唱歌」披露演奏会で歌われた。四部合唱で歌ったという⁶⁾。

ハ長調、4/4の単声用唱歌で、A（ハ長調、forte）-B（Aと音型・リズムが類似、forteのあとpiano）-C（ハ短調に転調、piu lento—poco rit, piano）-A（ハ長調に戻る、a Tempo, forte）-D（forte）と、曲の途中（Cの部分）で転調するだけでなく、速度も変化し、いったんフェルマータを置いてからAに戻るといふ、異色の構造を持つ。

【歌詞】（楽譜からおこしたもの。楽譜では総かな。）

ここの月日	たゆみなく	螢に雪に	身を委ね	A
花咲く春も	ひ子（ね）もすに	月見る秋も	夜もすがら	B
学びの道に	いそしみて	あかし暮らしし	甲斐ありて	C

栄えある今日の このむしろ 受けて戴く しるしぶみ A
今は学校 後に見て いづる今日こそ 嬉しけれ D (2・3番省略)⁷⁾

歌意：長い月日をたゆむことなく、苦勞して勉學に励み、花咲く春もずっと、月を觀る秋も一晩中、
學問の道にいそしんで、そればかりやって暮らしてきた甲斐があつて、栄えある今日のこの席
に座り、修了の証書をいただくことができた。今學校を後ろに見て出ていく（卒業する）今日
という日は非常にうれしいことである。

2-3 *《大禮奉祝曲》カンタータあるいは混聲四部合唱付き管弦楽曲(1915年献上)(ピアノ用スコア、 オーケストラ用スコア及びパート譜)

【解説】

幸田は東京音樂學校内外のバッシングにあつて1909(明治42)休職を余儀なくされ、ヨーロッパ
での音樂事情視察を経て翌年退職した⁸⁾のち、良家の子弟を対象にしたピアノ教室「審声會」を開い
て個人レッスンをしていた。大正天皇妃など皇族に音樂を教えて皇室との關係が深かつたことから、
大正天皇即位の禮が行われた1915(大正4)年とその翌年に、皇室関連の作曲をいくつか発表した。
なかでもこの曲は確認できるすべての作品の中でも最大のスケールを持ち、かつ楽譜が残る中で唯一
のオーケストラ作品である。

オーケストラ用スコア(自筆譜)が残されている。使用されているのはLeipzig製の五線紙である。
黒・赤鉛筆で加筆・訂正がある。

聲樂パートは混聲四部、オーケストラの編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴッ
ト2、ホルネット2、トロンボーン2、テナー・トロンボーン1、バス・トロンボーン1、チューバ1、ティ
ンパニ1、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。

曲は4楽章からなり、構成は以下のとおりである。

第1楽章：4/4、ニ長調、「Lento」、無伴奏混聲四部合唱曲(歌詞は下記の「其の一」)

第2楽章：変口長調：4/4「Andante Maestoso」 - 2/4「Allegro vivace」 - 4/4「Tempo I」(オー
ケストラのみ。「さくらさくら」による主題 - 自由な変奏 - 主題)

第3楽章：ニ短調、3/4、「Tempo di Menuetto」、(オーケストラのみ、「さくらさくら」による主題
によるメヌエット)

第4楽章：変口長調、4/4、「Andante con moto - Allegro con brio」—ニ長調、「Pesante - Allegretto」(オー
ケストラ伴奏付混聲四部合唱曲、ソプラノがさらに二部に分かれる箇所がある。歌詞は下記の「其の二」)
大正4年に、

侯爵鍋島直大氏の會長たる日本音樂界にては曠古の御大典を奉祝する為過般より曲譜を献上せ
んと鍋島會長、幸田延子女史、山田耕作氏の幹部員謹作の任に当り官(ママ)内省へ献上の手續
を為されたり曲譜は大禮奉祝曲と大禮行進曲との二種にて大禮奉祝曲は三十文字と七五調との兩
様ありて大禮行進曲は山田耕作氏の作曲にてオーケストラの演奏に用いらるる由なり

大禮奉祝曲

侯爵 鍋島直大作歌

幸田延子作曲(以下筆者により歌詞省略)

(「日本音樂界の奉祝作歌」1915：81-82)

という記事があり、歌詞が一致していることから、大正4年大正天皇即位の大典を機に宮内省に献上
された曲と推定される。伴奏がオーケストラのものとピアノの2とおり残るが、どちらが献上された

かは不明である。宮内庁に照会したが記録に残っていない由であった。演奏の記録も寡聞にして不明であるが、一部パート譜（別の人物による写譜と考えられる）があるので、実際に演奏することを前提にしていた可能性は高い。自筆のピアノ譜や、2・3楽章の下書きなど、多くの関連資料があり、相当な労力をかけたことをうかがわせる。

この曲は長大であるため、曲の分析には改めて稿を設けたい。

大正11年加藤長江が幸田にインタビューして書いたと思われる記事で「(前略) 今上陛下御即位式に際し献納した大礼奉祝四部合唱曲は特に女史が心血ををそそいで作ったもの女史にとりては一世一代の傑作であったと云う(後略)」(「楽壇の二元老」1922: 258) と述べられていることから、幸田自身にとってもこの曲は大きな意味を持つ、印象深い作品であったのであろう。

【歌詞】 鍋島直大作詞

其の一

あふぐ日の 御いつのひかり かぎりなき あまつみそらに 満ちわたるなり
あめのした 残るくまなく 大君の 万代いはふ けふにも あるかな

其の二

あめつちのむた かぎりなき おほみくらいに のほります
内外の人に あふがれて あを人ぐさも みめぐみの
つゆにいいいよ うるほひて みいくさつよく みくにとみ
みいつのひかり 和田中の 島やままでも かがやきて

御世はうごかし 万歳も (「日本音楽界の奉祝作歌」1915: 81-82)

(下線は筆者による。下線部分は、記事にはあるが、実際の楽譜にはない)

歌意:

其の一: 天皇を上に見上げる日の天皇の威光は限りなく天空中に満ちわたることよ。

天のした、残るところがなく天皇の御代がいつまでも続くことを祝うこの日であることよ

其の二: 天地とともにかぎりのない天皇の地位にのほります。内外の人に見上げられ、人民(草に例えている)も御めぐみの露にますます潤って、戦争に強く御国は富み、天皇の威光は海の中の島山までも輝いて、天皇の治世は動かない

2-4 《藤のゆかり (六月廿五日奉祝の歌)》ピアノ伴奏付き単声用歌曲 (1915年発表・出版)

【解説】

幸田成貴氏所蔵遺品の中に、「共益商社発行・大正4年5月初版、10年第5刷」と記載された奥付を持つこの曲単独の印刷譜があり、おそらく配付用に印刷されたものと思われる。4分の4拍子、F-Dur、lento、16小節のゆったりとした讃美歌調・唱歌調の曲で、きわめて和声的な伴奏を持つ。

これも大正天皇即位の礼に関連した作品で、大正天皇妃の誕生日(地久節)を祝うための曲である。同年の音楽雑誌に

是れまで六月二十五日皇后陛下地久節奉祝の唱歌なかりしが此の程左のものが出来各女学校にて採用の議ありという。

六月二五日奉祝の歌 藤のゆかり

下田歌子作歌

幸田延子作曲 (筆者により以下歌詞省略)

(「地久節の唱歌」1901: 62-63)

という記事が掲載されている。

【歌詞】 下田歌子作詞

1.

春日の山の 藤かずら
神のゆかりも 浅からぬ
こき紫の 色はえて
今日の佳辰に 匂うらん

2.

桜かざしし 宮人も
御苑に茂る 新桑の
はとり少女に 交じらいて
いそしむ御世ほど かしこけれ

歌意：

神との縁が浅くない春日山の藤（皇后のおしるし）は、濃いむらさきの色が鮮やかに、今日（皇后の誕生日）というめでたい日に匂っているだろう。桜を髪にかざった女官が、宮中の庭に茂っている新しい桑の葉を摘む少女たちに交じってはたらく治世は畏れ多いことである。

2-5 《神奈川県立高等女学校・女子師範学校（現横浜平沼高等学校）校歌》（1916年発表）

【解説】

この作品は、即位の礼の翌年に行われた裕仁親王（昭和天皇）の立太子礼（皇太子を定める儀式）に関連した曲である。

神奈川県立高等女学校とそれに併設された女子師範学校では、大正5（1916）年、立太子の礼を奉祝する記念行事の1つとして校歌を定めることとし、歌詞を佐々木信綱、作曲を幸田延に依頼した。

此の度の御大典にあたりましては我が校記念行事の一に数ふ可き特筆大書すべき事は校歌が制定せられた事でございます。我が校は已に創立以来女子師範学校は十年高等女学校は十五年という永い年月を重ねてまいりましたのですがいまだ校歌といつては出来てゐなかつたのであります。

然る所、此の度、我国における斯道の大家の御手によりて誠に立派な校歌がつくられたのであります。歌詞の方は歌道の泰斗、文学博士佐々木信綱先生の御つくり下さいましたのでありますし、曲譜の方は音楽の大家幸田延子先生の御作曲下さいましたのであつて、何れも両先生の御苦心の余となりました御傑作でございます。（「我が校の記念行事 一、校歌の制定」1916：21）

この曲は、立太子礼のあった11月3日に学内の奉祝会で披露された。

平沼高校同窓会「真澄会」によれば、「こうした当時最高の作詞者・作曲者によって校歌が出来たことは大変に貴重なことであり、この実現には本校第2期生であり東京音楽学校を卒業後制定当時音楽の教師として母校に勤務されていた末木美衛先生のご縁によるものであったという」（「母校校歌について」）。

末木自身は校歌成立について後年以下のように説明している。

前に作曲をお願いしてあったので、幸田先生のお宅へ頂きに上りました。早速聞かせて頂いた

曲は、第一の歌詞と第二の歌詞の間に立派な間奏曲を作曲され、歌の部分も、間奏の部分も、実に大曲で、コーラスや、オーケストラで演奏される大曲でした。併し先生は中等学校で、唄うのだからとやさしい方の曲を下さいました。これも第一の歌はおごそかに立派に、第二の歌は明るく勇ましく、それぞれの歌の心を充分表わした立派な曲です。(末木2000：83)

末木（旧姓神谷）美衛は東京音楽学校本科器楽部でピアノを学んで明治42年に卒業しており、幸田の和声学の試験点数表に名前があることから、幸田の授業を受けるなどして、在学中から接点があったと考えられる（『東京音楽学校一覧』1908・1909、「明治42年学年試験成績」）。この曲の作曲依頼がされた大正5年には幸田は東京音楽学校から離れていたが、皇族とゆかりが深い女性音楽家ということで、適任とされたのであろう。このような依頼がされたことから、当時幸田の作曲活動はある程度知られていたことがわかる。

末木の記述によると、幸田は佐々木の歌詞に対して、どちらかが無駄になることを承知のうえで、もう1曲、オーケストラ伴奏と間奏部分付きの合唱曲を用意していたことになる。大札奉祝曲と並んでオーケストラ曲の作曲の記録であるが、楽譜は未見である。同じ曲をアレンジしたものなのか、まったく新しい旋律を持ったものなのかも不明である。

曲はPoco Lento 4分の4拍子。第1節の前半はイ短調で荘重に始まり、1節の後半長調に転調するが、すぐに原調に戻る。第2節はイ長調と明朗になり、その後半天皇の治世を称える歌詞になると、勇壮なファンファーレのようなフレーズが高らかに歌われる。校歌としては繰り返しがほとんどなく、次々と雰囲気を変容していく、珍しい構成である。調性は発表された大正5年の数字譜によったが、現在はト短調―ト長調で演奏されている。

この曲の特徴は、最初の2小節が、瀧廉太郎の《荒城の月》とまったく同じ点である。平沼高校関係者からは、これは意図的なもので、夭折した弟子への一種のオマージュと解釈されている⁹⁾。

【歌詞】 佐々木信綱作詞（濁点は筆者が補った）

学校が第2次世界大戦後佐々木信綱に再度依頼して、作詞者自身によって軍国主義的な要素を排除する方向で一部改訂された。下記に引用するのは、元の版である。

1.

をしへの道の みことのり
われらが日々の をしへなり
みそらに匂ふ 富士の峰
われらが胸の かゝみなり

2.

百船ちふね つどひ寄る
みなとの栄え きはみなし
栄ゆる御代の みめぐみに
御くにの花と さきいで舞

（「我が校の記念行事 一、校歌の制定」1916：22）

歌意：

教育についての詔書は我々が毎日守るべき教えである。空に匂う富士山の峰は我々の心の鑑となるものである。たくさんの船が集まり寄ってくる（横浜の）港は限りがないほど栄えている。そのように栄えている天皇の治世のもたらす恵みを受けて、国のための花となって咲きましょう。

2-6 《常若の花（3月6日奉祝の歌）》ピアノ伴奏付き単声用歌曲（1929年発表・出版）

2-4の旋律はそのままに、昭和天皇妃の誕生日を称える内容の歌詞が与謝野晶子によって付けられ、《常若の花（3月6日奉祝の歌）》となった。ただし調は変ホ長調と変更されている。「共益商社発行昭和4年8月」という奥付の、配付用印刷譜が残る。

この曲は若狭万次郎編『新女子音楽教科書第1編』にも、女声三部合唱曲に編曲して所載されている（1933：116-117）。

【歌詞】 与謝野晶子作詞

1.

畏く光る天（あま）つ日の 神の御裔（みすえ）のくはし姫、
后（きさい）の宮の生（あ）れませる 春の吉き日はめぐりきぬ。

2.

匂ふ桜の常若に めでたき如くおはしませ、
国つ御民（みたま）の大いなる 愛の鑑とおはしませ。

歌意：

畏れ多く光る天の太陽の神の末裔の皇后が誕生するという、春のよい日がめぐってきた。匂う桜が常に若くめでたいようにあってください。国の民の大いなる愛の鑑であってください。

2-7 《蘆間舟》ピアノ伴奏付きアルト・ソロ～女声三部合唱曲

《天》無伴奏混声四部合唱曲（1931年発表）

【解説】

1931（昭和6）年、6月7日東京音楽学校にて、幸田の還暦と楽壇生活50年を記念した功績表彰会が開催され、幸田は一種の復権を果たした。当時の東京音楽学校校長の乗杉嘉壽（1878-1947、1928から在職）が表彰会委員長であることから、おそらく彼との親交が、この名誉回復の一端であったと考えられる。

「幸田延子先生功績表彰式順序」と題された式次第によると、主催は「幸田延子先生功績表彰会」、祝辞や記念品贈呈のあと、幸田の作品が「天」「蘆間舟」の順に歌われ、その後ブラームスの三重奏曲が妹の安藤幸らによって演奏された。

この功績表彰会は、以下の新聞の予告記事のように、新聞や音楽雑誌にも取り上げられた。

（前略）今回女史の還暦と楽壇生活五十年を記念して門下生及び上野の音楽学校によって功績表彰会が計画されていたがこの程具体化して来月七日上野の音楽学校講堂に於て盛大な表彰式と演奏会そして上野の精養軒に於て晩餐会が催される事になった。当日は特に皇太后陛下のお許しを得て御製「朝みどり」に幸田女史が作曲したのを合唱させるはずである。（後略）（読売所載）（「盛んな表彰式」1931：42）

事後、同窓会誌に以下の記事が掲載された。内容は式次第と同じである。

音楽演奏

い、合唱

明治天皇御製

天（混声四部無伴奏）

幸田延子謹作

蘆間舟（アルト独唱付女声三部）

合唱	本校学友会員
独唱	斉藤英子氏
指揮	大塚淳氏
伴奏	高折宮次氏

（「幸田女史功績表彰会」1931：4）

幸田家に、「記念」と書かれた表紙を持った、私家版と思われる印刷冊子が残されている（当日の写真も残っている）。裏表紙に「昭和六年六月七日 幸田延子先生功績表彰会」と印刷されていることから、関係者に配布されたものと推測される。表紙と曲との間に歌詞ページがあり、「東京音楽学校校長乗杉嘉壽謹書」として歌詞を墨書したものが印刷されている。

続く楽譜は「蘆間舟」「天」の順に掲載され、それぞれの曲に「蘆間舟 für Alto Solo und dreistimmigen Frauenchor mit Begleitung des Pianofortes」「天 für gemischten Chor(a capella)」というように、日本語とドイツ語が混在したタイトルが付けられている。

《蘆間舟》はアルト・ソロの第1部（6/8 ト短調 Allegretto）と女声三部合唱（6/8 ト短調 Allegro molto）のピアノ序奏からト長調 Meno mosso—Allegro molto）の第2部からなる。ピアノ伴奏部にはアルペジオが多く使われ、付点4分音符を基本とした悠揚迫らざる旋律が典雅に進行する。第2部で無伴奏部分があったり、和音を分散させたような力強い下降音型を繰り返したり、など変化も付けられている。最後は主和音の下降分散和音をフォルテッシモで繰り返して盛り上げて終わる。

《天》はアカペラの混声四部合唱で、4分の4拍子、ヘ長調、Lento、2回同じ歌詞と旋律を繰り返すが、2回目は、1回目のフォルテがフォルテッシモに、ピアノがピアノッシモに、と、より振幅を大きく強調して演奏するよう記号が付けられている。最後はフォルテッシモ、molto ritard. と晴れやかに終わる。ほとんどすべてが4分音符で、和声課題作品のように和声感にあふれた、優美な旋律を持った曲である。この曲は門下生にとっても大切な作品であつたらしく、昭和31年池上本門寺墓地に門下生たちによって建てられた記念碑には、《天》の楽譜と歌詞（安藤幸の揮毫による）が刻まれている。

《天》《蘆間舟》には、遺品中に自筆完成稿清書など関連資料がいくつも残る¹⁰⁾。作曲の過程を示すものはほとんどないが、ドイツ語のFrakturと呼ばれる古風な書体で書いたタイトルを練習した形跡があったり、自筆手稿や印刷譜に多数の書き込みがあったり、と、かなり思い入れがあったようすがうかがえる。

このち幸田は、自身のピアノ教室の生徒の練習用と思われるような曲を除くと、作品を公表していない。

【歌詞】明治天皇作（『明治天皇御集』（武田 1943:133 及び 154）によるとそれぞれ明治37年と38年の作）

「天」あさみどり 澄みわたりたる 大空の 広きをおのが 心ともがな

「蘆間舟」とる棹の ころろ長くも こぎよせん 蘆間の小舟 さわりありとも

歌意：

「天」浅緑色に澄みわたる広いおおぞらのように自分の心がありたいものである。

「蘆間舟」葦が生えている水路を進む小さい舟のように、いかなる障害に遭遇しようとも、あきらめたりしないで、忍耐強い心を持って前へと進んでゆきましょう、その小舟のような存在になりましょう。

第3章 作曲（発表）年代不明の作品

本章では、作曲年あるいは発表年が不明の作品を紹介・解説する。幸田家に残る手稿譜には他にも、伴奏付きの唱歌風歌曲や、比較的長いピアノ曲など、幸田の作である可能性の高いものがあるが、今回は少なくとも公表を前提としていた可能性が高い作品に限定した。

3-1 Sonata für Violin und Klavier ピアノ伴奏付きヴァイオリン・ソナタ

【解説】

「Sonata für Violin und Klavier von Nobu Koda」と書かれた表紙を持つ手稿譜が残る。ヴァイオリンとピアノの楽器指定がある。全1楽章形式で4分の4拍子、イ短調、moderato、最後近くに数小節の未完部分がある。作曲年や、当時演奏されたかどうかなどは、不明である。2-1のヴァイオリン・ソナタ同様明確なソナタ形式を取るが、様式的には古典派風の2-1よりも明らかにあとの時代のスタイルになっているため、2-1より後年の作品であると考えられる。

ソロ部に指・弓使いの書き込み、未完部分に鉛筆書で音符の書き込み、鉛筆書で訂正など、たくさんの書き込みがあるが、幸田自身のものかどうかは不明である。

曲は情緒的で甘美なイ短調の第1主題がヴァイオリンで提示され、ピアノで繰り返されるが、このときのピアノに付けられたヴァイオリンのモチーフが、展開部で主に用いられる。第2主題はヘ長調でアルペジオに支えられた牧歌的な旋律である。ヴァイオリンとピアノが主役を交代したり、展開部がどちらの主題でもないモチーフを元に展開したりするなど、2-1に比べて比較的自由度が高い。短いカデンツァが2つ提示されたあと、ピアノニッシッシモで終わる。

3-2 《今日の幸》無伴奏単声用歌曲

【解説】

二つ折りの印刷譜が残る。ハ長調、4分の4、Moderato。伊達宗曜の歌詞に、唱歌風の勇ましいが単純なメロディーが付けられている。2番は1番の繰り返しだが、最後がフォルテッシモでpoco rit.と荘厳に終わる。アウフタクトが印象的である。

【歌詞】 伊達宗曜作

1. 御稜威輝くこの秋の 今日のもとみにかしこくも 竹の園生のわかまつを あふぎみるこそ 嬉しけれ
2. あやにたふとき貴人（あてびと）におさなきわざを畏くも きこえまゐらすわが友の けふの幸こそうれしけれ

歌意：

天皇の威光に輝くこの秋の今日の集まりに畏れ多くも、皇族の若い松を仰ぎ見ることはうれしいことである。非常に貴い貴人に幼い行いを申し上げる我が友の今日の幸いはうれしいことである。

3-3 《連弾小曲》（ピアノ曲）

私家版の見開き2ページの印刷譜が残る。シンプルでかわいらしくにぎやかな曲で、生徒に弾かせる教材的な性格の作品かもしれない。ハ長調、4分の2拍子、Allegro。セカンドとプリモがメロディーと伴奏に固定されることなく役割を交代したり、転調したり、と変化を付ける工夫がされている。

3-4 《小變奏曲》(ピアノ曲)

私家版の印刷譜が残る ハ長調、4分の4拍子、Moderato。8小節のC-D-E-F-Gの5音のみ使ったシンプルな主題が提示されたあと、簡単な4つの変奏が続く(4曲目のみc-moll)。5つ目の変奏にはコードが付いている。その平易さから、これも生徒用に作曲された可能性がある。

おわりに

本稿では、幸田の作品のうち、公表されたもの、あるいは公表を前提としたものに焦点をあて、その由来と内容を紹介した。このように通覧してみると、いくつかの特徴が明らかになる。

まず、外からの動機付けがなされた、ある種儀礼的な作曲が多い、ということが挙げられる。授業の課題として、とか、何かの行事のために、あるいは依頼を受けてなど作曲の契機が外発的であることがほとんどで、自発的能動的な意思を感じさせる作曲は少なくとも公表された作品には見あたらない。

また、その動機付けとも関連するが、一般向けの曲は書かなかった一方で、皇室がらみの作曲が非常に多い。時代を鑑みれば声楽曲の歌詞が尊王的であるのは当然としても、即位の礼や地久節を奉祝したり、自作の歌詞に明治天皇の御製を選んだり、と、多分に皇室寄りである。何か皇室関係の作曲が必要となったとき、皇族に音楽を教えるなどして関係が深かった幸田が、適任とされたのであろうし、幸田の方でもそれを良しとして引き受けたと推測される。

地久節の歌や女学校の校歌というように、女性向けの作曲、あるいは女声を用いた曲(《蘆間舟》)が多いのも特徴である。女性関係の曲は女性に作曲を依頼した方がふさわしい、となったとき、当時作曲ができる女性が他にいなかったからであろう。

次に、曲そのものに注目してみたい。全曲、シンプルで品のよい優雅さが基調となっている。悲痛な箇所、荘重な部分はあっても、激情的には流れない。この点は、幸田がウィーンでついたローベルト・フックスの作風と共通するものがある。ロマン派的な要素も散見されるが、基本的には古典派風といってよいのではないだろうか。

声楽曲では、転調に重きを置いており、短い歌曲でも、ほとんど必ず転調がある。1拍に多くの音符は使用しないため、ゆったりと進行する。ピアノ伴奏にはアルペジオが多用される。全般的に合唱曲は讃美歌調・唱歌調で、和声感の非常に強い、あたかも和声課題の解答のような印象を与える曲も多い。幸田はウィーン留学から帰国後、和声学を担当しており、得意分野であったことがここにも表れている。

器楽曲は、ソナタ形式や変奏曲形式をかなり厳格に守って、ここでも破調はない。

また、幸田の曲は、東京音楽学校や女学校など、限定された場所でしか演奏されなかったことも特徴である。

以上の特徴を集約すると、幸田の作曲活動は、作曲技法という点でも、発表の場という点でも、決められた枠のようなものを超えない範囲で行われていた、といえるのではないだろうか。その枠は、幸田自身にとっての「矩」であった、ともいえるし、それが彼女の限界であったともいえよう。

一方で、初期のヴァイオリン・ソナタから最後の《蘆間舟》《天》へと編年で並べてみると、次第に作曲技法が洗練され高度になっていくことがわかる。また、最初のヴァイオリン・ソナタから20年後に、規模の大きい《大礼奉祝曲》のような声楽付きオーケストラ曲を書くに到るには、何らかの形でたゆまず作曲の勉強を続けていたことをうかがわせる。

同時代の西欧音楽界はいうに及ばず、1912年に日本人初の交響曲《かちどきと平和》を作曲した

山田耕筰（1886-1965）と比較しても、幸田の作曲技法ははるかにナイーブで、いささか時代遅れであることは否めない。しかし、東京音楽学校に未だ作曲を教える科さえなかった時代の幸田の作曲活動は大きな影響を与えたであろうし、それが女性によってなされたということにも大きなインパクトがあったであろう。また、作曲が自らの専門でも教授科目でもなく、特に東京音楽学校退職以降在野の音楽教室でピアノを教えるようになってからは必要もなかったのにもかかわらず、60歳になるまで作曲を続け、その技量を向上させ続けた努力は、高く評価してよいのではないだろうか。

筆者は2016年と2017年、レクチャー・コンサートで幸田の主要な作品の演奏を行った¹⁾。《大礼奉祝曲》は初演であった可能性もある。実際に演奏で聞くと、素直でのびやかな幸田の曲には、歴史的な価値だけではない魅力がある。また芸術的な曲を作りたいという志のようなものも感じられる。今後他の作品も含めて演奏の機会が増え、幸田の作曲活動が広く知られるようになることを願いたい。

参考資料 幸田延関連年譜

西暦	元号	年	
1870	明治	3	東京都下谷区に生まれる。
1881		14	東京師範学校附属小学校でメーソンに唱歌を習う。音楽取調掛でピアノを習い始める
1882		15	音楽取調掛に入学
1885		18	音楽取調所第1回全科卒業。研究科にすすむ
1888		21	音楽界からの第一号文部省派遣留学生に決定
1889		22	横浜港出帆。ボストンのニュー・イングランド音楽院入学
1890		23	ウィーン着。音楽院外で修業
1891		24	ウィーン音楽院に入学、ヴァイオリンをJ. ヘルメスベルガー（Jr.）、和声学をR. フックスに習う
1892		25	休学（1893復学）
1895		28	ヴァイオリン・ソナタ（2-1）作曲。帰国。高等師範学校附属音楽学校教授に
1897		30	ヴァイオリン・ソナタ発表
1899		32	東京音楽学校、再独立。
1900		33	瀧廉太郎、ピアノ曲《メヌエット》作曲
1901		34	〈今は学校後に見て〉（2-2）『中学唱歌』に所収
1903		36	瀧、ピアノ曲《憾》作曲
1908		41	「やまと新聞」「東京朝日新聞」などにバッシング記事
1909		42	休職、一年余のヨーロッパの音楽事情視察
1910		43	帰国、退職。山田耕作、渡独しベルリンで作曲を学ぶ
1911		44	紀尾井町で「審声会」をはじめる
1912	大正	1	山田、日本人初の交響曲《かちどきと平和》作曲
1915		4	大正天皇即位記念《大礼奉祝曲》（2-3）献上、地久節の歌《藤のゆかり》（2-4）発表
1916		5	神奈川県立高等女学校・女子師範学校校歌（2-5）発表
1929	昭和	4	地久節の歌《常若の花》（2-6）出版
1931		6	功績表彰会で《蘆間舟》《天》（2-7）発表
1946		21	死去

注

- 1) 式部職楽師兼伶人。明治14年以降音楽取調掛で教鞭を執った。奥の履歴については『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第1巻、278-279頁を参照されたい。
- 2) 幸田のボストン留学については平高（2014：191-211）を参照されたい。
- 3) グレーデナーとフックス、及び幸田のウィーン留学については平高（2013：101-121）を参照されたい。

- 4) 幸田成貴氏所蔵史料。以下幸田の作品の自筆譜、同時代の印刷譜については出典は同じ。
- 5) 「幸田延教授がピアノを弾き、ヴァイオリンは完成していた第一楽章と第二楽章を、二人の研究生、幸田幸と鈴木フクがそれぞれ一楽章ずつ分けて演奏したのであろう」（瀧井2004：76）。
- 6) 遠藤宏『明治音楽史考』有朋堂、1948年、322-323頁
- 7) 東京芸術大学百年史編集委員会編 1990：69。なおこの楽譜ではCの部分の最初の速度記号は「pinlento」と書かれているが、piu lentoのことであろう。
- 8) この間の事情については平高（2015：13-27）を参照されたい。
- 9) 同校音楽教諭岡田宏氏のご教示による。ほかにも同じ趣旨の発言は同校関係者からしばしばなされている。例えば
伊藤美栄子「校歌 由来記」
酒巻和子 昭和音楽大学ペリオド音楽研究所 第22回公開講座「欧州音楽留学の先駆者 幸田延と瀧廉太郎」（2018年1月18日）における横浜平沼高校校歌についての解説（なお、資料が共通しているため、酒巻の解説には本稿と同趣旨の部分があった）。
- 10) 自筆手稿（完成稿清書・書き込み有）、ドイツ語タイトル部の練習（Fraktur）、完成稿清書（途中まで）、一部旋律、ピアノ部分なしの手稿譜、印刷譜（ファイルと同じ）、訂正・追加多数書き込み有、など
- 11) 2016年7月9日ヤマハ銀座店「GINZA Yamaha TAMAGAWA MUSIC DAY 2016」
レクチャー「日本人初のヴァイオリン・ソナタ」
ヴァイオリン・ソナタ変ホ長調（3楽章形式の1・2楽章） ヴァイオリン：小倉達夫／ピアノ：林あづさ
ヴァイオリン・ソナタイ短調（1楽章形式） ヴァイオリン：小倉達夫／ピアノ：林あづさ
《蘆間舟》ソロ部分 アルト独唱：伊藤萌里／ピアノ：林あづさ
2017年9月28日ヤマハ銀座店「TAMAGAWA Music Festival at Yamaha Ginza 2017」
レクチャー「作曲家としての幸田延」
《大礼奉祝曲》1・4楽章（ピアノ伴奏）
《藤のゆかり》
《蘆間舟》《天》
ソプラノ：伊藤奏子／（メゾ）ソプラノ：武田みさき／アルト：白濱美南
テノール：小池誠／バス：櫻庭雅之／ピアノ：林あづさ

参考文献

- 青柳有美「幸田女史西楽談」『女学雑誌』452号、女学雑誌社、1897年
伊藤美栄子「校歌 由来記」<http://www.masumikai.org/>（2018年1月22日閲覧）
遠藤宏『明治音楽史考』有朋堂、1948年
加藤長江「楽壇の二元老」『現代』大日本雄辯會、1922年8月、256-258頁
幸田延「私の半生」『音楽世界』第3巻第6号、音楽世界社／敬文館、1931年、33-42頁
幸田延（池辺晋一郎 校訂・補筆）『2つのヴァイオリン・ソナタ』全音楽譜出版社、2006年
末木美衛「校歌の制定」創立百周年記念実行委員会・歴史編纂部会編『百周年記念誌 花たちばな—卒業生一世の証言』県立横浜平沼高校内「真澄会」、2000年、82-83頁
瀧井敬子「Ⅱ幸田露伴と洋楽家の妹、延」『漱石が聴いたベートーヴェン』中公新書、2004年、47-78頁
武田祐吉編『明治天皇御集：類纂謹註』明治書院、1943年

- 東京音楽学校『東京音楽学校一覧』明治41-42年・42-43年、東京音楽学校、1908・1909年
- 東京音楽学校「明治42年学年試験成績」東京芸術大学音楽学部明治期公文書類（音楽学部1号館倉庫所蔵分）
- 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第1巻、音楽之友社、1987年
- 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』演奏会篇第1巻、音楽之友社、1990年
- 東京芸術大学附属図書館貴重資料データベース「音楽取調掛時代文書綴 巻43」『音監回議書類』上 明治17年、<http://images.lib.geidai.ac.jp/>（2018年1月4日閲覧）
- 萩谷由喜子『幸田姉妹—洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸』ショパン、2000年
- 平高典子「幸田延の作曲作品リスト」『「音」の社会史—19世紀から20世紀へ—』、「音」の社会史研究会、1993年、30-37頁
- 平高典子「幸田延のウィーン留学」『論叢 玉川大学文学部紀要』第53号、2013年、101-121頁
- 平高典子「幸田延のボストン留学」『論叢 玉川大学文学部紀要』第54号、2014年、191-211頁
- 平高典子「幸田延のヨーロッパ音楽事情視察」『芸術研究—玉川大学芸術学部研究紀要—』第7号、2015年、13-27頁
- 若狭万次郎編『新女子音楽教科書第1編』共益商社、1933年
- 「地久節の唱歌」『音楽界』15年165号、音楽社、1901年、61-62頁
- 「日本音楽界の奉祝作歌」『音楽界』15年170号、音楽社、1915年12月、81-82頁
- 「盛んな表彰式」『音楽世界』第3巻第6号、音楽世界社／敬文館、1931年、42頁
- 「幸田女史功績表彰会」『同声会報』第174号、東京音楽学会同声会、1931年、4頁
- 「母校校歌について」神奈川県立横浜平沼高等学校同窓会 真澄会 <http://www.masumikai.org/>（2018年1月22日閲覧）